バルセロナおよびブダペストで2005年に開催された国際ワークショップ・ハンガリー医学図書館協会年次大会への参加報告

殿崎 正明 *

日本医科大学中央図書館

I. はじめに

2005年の7月および11月にスペインのバルセロナとハンガリーのブダペストで夫々国際ワークショップとハンガリー医学図書館協会の年次大会が開催され、計らずも出席の機会を得たのでその概要を報告する。前者の国際ワークショップは、ProQuest 社が後援を行っており、私はアジア太平洋地区の代表として同社から講演出席の依頼を受け、参加させて頂いた。また、ハンガリー医学図書館協会の年次大会は、同協会の会長から講演出席の依頼を受け、NPO 法人日本医学図書館協会からの助成金も一部頂いて参加することが出来た。以下にそれぞれの国際ワークショップ・年次大会へ参加した報告を行う。

II. 「ヘルス・ライブラリーの将来構築」国際ワークショップ

スペインのバルセロナ自治大学 (Universitat Autònoma de Barcelona, UAB) ジョセフ・ラポルテ図書館財団 (Josep LaPorte Library Foundation, JLLF) は、2005年7月7日と8日に「ヘルス・ライブラリーの将来構築」をテーマに国際ワークショップを開催した。

会場となった Casa Convalescència は、サン・パウ病院 (Hospital de la Santa Creu i Sant Pau) の敷地のなかにある多くの会議室やホールからなる複合施設である。同病院は、サグラダ・ファミリアのそばにあり、アントニ・ガウディ Antoni Gaudí と同時代の建築家ルイス・ドメネク・イ・ムンタネル Luis Domènech i Muntaner によるモダニズムの重要な建築例として病院の区域一帯が UNESCO の世界遺産に登録されている。1905年から1930年にかけて建設され、病院機能は殆ど地下にあり、地下に廊下がはりめぐらされており、敷地内を歩い

サン・パウ病院の正面

サン・パウ病院の正面からサグラダ・ファミリアを望む

サン・パウ病院内の風景

*Masaaki TONOSAKI : 〒113-8602 東京都文京区千駄木1-1-5.
Tel.03-5814-6949 Fax.03-3822-2405 tonosaki@nms.ac.jp
(2006年4月18日 受理)

ていても白衣を着た医師や看護婦には殆ど出会うことなく、修道院の中を歩いているような雰囲気である。指定された宿泊は、Hotel Bel Artで、サン・パウ病院にもサグラダ・ファミリアへも徒歩で10分以内の少し坂を上った場所にあった。

Ⅲ. ジョセフ・ラポルテ図書館財団 (JLLF)

JLLF¹⁾ は、1999年7月に12の機関へ伝統的・デジタル・ライブラリを提供するための非営利団体組織として設立された。財団理事会には、2つの主要大学バルセロナ自治大学とバルセロナ大学をはじめとする以下の機関の理事が含まれている。

The College of Physicians of Barcelona
Scientific Societies within the Academy for Medical
Sciences of Catalonia and Balearic Islands
The Catalan Institute of Health
The Municipal Institute of Health Care of Barcelona
Hospital de la Santa Creu i Sant Pau
Fundació Parc Taulí
Fundació Puigvert
Institut Universitari Dexeus
The Catalan Consortium for University Library Services

会場となったCasa Convalescència

JLLFの使命は、ライフおよびヘルス・サイエンス分野におけるナレッジ・マネジメントの概念を確立することであり、以下の原則が掲げられている。

1. 知識に基づく高品質な意志決定の過程で必要となる教育と情報を医療消費者と専門家に提供すること。
2. ヘルス・サイエンス分野における知識の生産、検索、選択、統合、移転、および普及を促進すること。
3. 医療専門家、教員、学生、および消費者に関する情報と知識の将来および現在の要求に情報とコミュニ

Casa Convalescènciaの前で記念撮影。向かって私の左がDr. Livia Vasas

(<http://www.fbjosep laporte.org/healthlibrary/img/foto017.jpg>
[accessed 2006-04-17])

ニケーション技術を用いて対応すること。

今回の国際ワークショップは、JLLFが伝統的なライブラリの再建、デジタル・ライブラリ機能の提供、ナレッジ・マネジメント・センター、研究等の機能を提供する中での、今後の図書館のあり方を検討するためにテーマを「ヘルス・ライブラリーの将来構築」として開催されたものである。

地下の図書館閲覧室にて

(<http://www.fbjosep laporte.org/healthlibrary/img/foto018.jpg>
[accessed 2006-04-17])

Ⅳ. 国際ワークショップの目的²⁾

健康に関する意志決定を行う際に、グローバル化、インターネット、World Wide Web, genomicsや幹細胞研究、インフォームド・コンセント、等の概念の導入によって情報市場は変化してきている。患者と市民は、医師、看護師、および保健所が利用可能なものと同じ情報を求めるようになって来て、図書館が情報ニーズに応える、情報サービスを設計する方法も変わって来ている。し

たがって、新しい問題としては、どこに医学図書館の未来があるか？デジタル・ライブラリは如何に医療、教育、および研究の効率と品質の改善を導いて行くか？情報戦略は知的所有権、基金、および患者の知る権利に関してどのように政策論争と関連するか？といったテーマが挙げられる。この第1回国際ワークショップは、世界中から来ている専門家が共有する経験を踏まえてこれらの問題を明確にする目的で開催された。

V. 国際ワークショップの内容

2005年7月7日15時より、開会式が行われ、Dr. Albert J. Jovell (Josep Laporte Library Foundation), Mr. Simon Beale (Senior Vice-president of Sales & Marketing International, ProQuest), Mr. Lluís M. Anglada (Director of the University Libraries Consortium of Catalonia) の挨拶が行われた。

15時30分から「医学図書館およびヘルス・ポータルの現在と将来」をテーマに Sergi Blancafort (Fundacio Biblioteca Josep Laporte) 氏を座長としてバルセロナの Ms. Laura Fernández (Josep Laporte Library Foundation) による「JLLCにおける医学図書館およびヘルス・ポータルの現在と将来」が最初に発表された。

次に同じくバルセロナの Mr. Vladimir de Semir (Scientific Communication Observatory, University Pompeu Fabra) により「時代は変化しつつある：世界のヘルス・コミュニケーション状況」として産業革命から知識社会までの学術情報が社会に伝播して行く様を Nature に発表されたワトソン・クリックの二重螺旋構造の論文が New Chronicle, New York Times 等で如何に紹介されて行ったか等をはじめとしてメディアの多様化と迅速性について論じられた。

さらに米国の Ms. Suzanne BeDell (Senior Vice-President of Publishing, ProQuest) は、ProQuest の歴史と現在の情報提供サービス内容と医学図書館員が解決すべき問題について紹介された。

17時から Mr. Virgili Páez (Health Department, Government of Balearic Islands) を座長としてブラジルの Dr. Regina C. Figueiredo Castro (Health Sciences Communication, BIREME / PAHO / WHO) により「パーチャル・ヘルス・ライブラリと SciELO：ラテン・アメリカおよびカリブ海地域のヘルス・サイエンス・コミュニケーション戦略」として1967年にブラジルに設立された BIREME (Biblioteca Regional de Medicina) の活動、1982年以降682誌から36万件以上を収録している書誌データベ

ス LILACS (Latin American and Caribbean Literature on the Health Sciences), 1998年から300誌以上のフルテキストへのアクセスを可能にしている SciELO (Scientific Electronic Library Online), 等の説明があり、最後に2005年9月にブラジルのサルバドールで開催予定の ICML9 (International Congress on Medical Librarianship) を紹介して終わった。

翌日の8日は9時から Mr. Enric Pineda (Fundació Biblioteca Josep Laporte) を座長として「デジタル・ライブラリの国際的経験」をテーマに、英国の Ms. Christine Coley (National Core Content Group, National Health Service, England) が「The NHS England」として2001年以降始められた英国における書誌データベース、電子ジャーナル、電子図書の導入状況および交渉の問題、利用状況等の報告を行った。

二番目にオーストラリアの Ms. Sue Rockliff (Senior Librarian, The Queen Elizabeth Hospital, South Australia) は「オーストラリアのデジタル・ヘルス・ライブラリ」と題してオーストラリアの紹介から始まり、ヘルス関係予算、病院図書館、E-resources とその利用、技術的問題、電子ジャーナルのアーカイブ化、ナショナル・サイト契約、コンソーシア等の状況についての紹介がなされた。

三番目にノルウェーの Mr. Kjell Tjensvoll (Senior Adviser, Norwegian Knowledge Centre for Health Services) は、「ノルウェー・エレクトロニック・ヘルス・ライブラリ」と題して、英国の NHS プロジェクトに刺激されて2000年から検討されたこと、そのサービス対象、医学情報ナショナル・コンソーシアム、その書誌データベースおよび電子ジャーナルの種類、将来の方向性等を述べた。

四番目はハンガリーの Dr. Livia Vasas (Director-General, Semmelweis University Central Library, Hungary) で、「ハンガリーの医学電子資料に向けて」として国民約1,000万人に対して医師3.3万人、薬剤師0.5万人、歯科医師0.5万人、看護師5万人、医学生2万人がいること、施設として病院は183、医学研究所18、医科大学4、図書館125、からなる状況における書誌データベース・電子ジャーナルのコンソーシアムの内容と司書の教育・訓練、管理と宣伝の重要性等について述べた。

五番目の発表の筆者は、外国学術雑誌の価格高騰の現状、電子ジャーナル・コンソーシア状況、学術雑誌における研究者の役割と図書館との関係、外国学術雑誌価格高騰問題解決の一つとして、1) 図書館は異常に高額な雑誌は購入しない、2) 研究者はそれらの雑誌に論文を投稿しない、そして3) それらの雑誌の編集者や peer-

reviewer にならない、所謂「三ない運動」の提唱、日本の研究成果の8割が外国の学術雑誌に掲載されている事実を例に、自国の研究成果は自国の学術雑誌に発表することによって寡占化されている雑誌のあり方を変える提案とその方法・戦略について発表した。その解決策として最も重要な点の一つは、日本の場合文部科学省および厚生労働省等の政府が研究助成金を出す条件として世界で利用されている主要な書誌データベースに収録されている自国の雑誌に発表することを条件とすることである。その結果、自国の学術雑誌に研究成果が集まり、自国の学術雑誌の育成につながる。そして図書館は高額な外国雑誌を従来の様に買い続けなくて済むようになり、論文の成果を買い戻すという税金の二重投資、無駄遣いを防ぐことが出来る。私の発表に対して米国国立医学図書館 (National Library of Medicine, NLM) の Ms. Jane Griffith から何故研究助成金を出す側がその条件を限定できないのか不思議であるという質問が出され、それが日本の現状であるという回答のみを行った。

20分のコーヒー・ブレイクをはさんで11時から Ms. Laura Fernández を座長としてバルセロナの Mr. Antoni Parada (Health Technology Evaluation Agency, Government of Catalonia) が「ヘルス技術評価と情報専門家」と題してヘルス技術評価 Health Technology Assessment を行う非定型司書または情報専門家の業務内容, non-profit company である CAHTA (Catalan Agency for Health Technology Assessment and Research) の情報提供サービス、オープン・アクセス、科学的根拠、標準化の提案、新製品の評価等を扱う情報専門家の新しい役割について論じた。

米国の Ms. Jane Griffith (National Library of Medicine, USA) は、「ヘルス・インフォメーション専門家の役割：米国の観点」をテーマに米国の現状として電子化とインターネットの影響、遺伝学研究成果の発達、個人的医療に関する関心、オンライン・ヘルス資源の発達、インフォメーションистの訓練、司書の臨床現場・生物医学研究への進出、MedlinePlus の利用状況、医学図書館のナショナル・ネットワークと地域資源とのリンク、政策的問題として人権、知的所有権、政府助成研究成果の公開とオープン・アクセスの動き等について触れ、情報専門家の将来としては、学際的チームの主要メンバーとなることや多様なデジタル・コレクション－機関リポジトリの管理者的役割が求められることを示唆した。

三番目は、バルセロナの Dr. Joan Escaraball (Bellvitge Hospital) が同じく「ヘルス・インフォメーション専門

家の役割」をテーマに医者立場から大学病院における情報の種類、臨床医のための得た情報、ガイドライン情報、会話による情報の重要性、オンライン・リファレンス、ヘルス・サイエンス・ライブラリアンの重要性等について触れた。

講演の最後にジョセフ・ラポルテ図書館財団の Dr. Albert Jovell (Josep Laporte Library Foundation-President of the Spanish Patient Forum) が「知識管理と21世紀の情報サービス」をテーマに、ヘルス・ライブラリを基盤とした医療における知識管理シンクタンクを指向した知識ベース管理過程の明確化と今後の社会的方向とヘルス・インフォメーション、疾病別情報提供サービスと図書館機能の変化、等について具体例を挙げての発表が行われた。

昼食をはさんで午後3時から5時までグループ討論が1)ヘルス・ライブラリの将来、2)ヘルス・インフォメーション専門家の役割、3)スペインの状況、の3班に分かれてSWOT (= strengths 強み, weaknesses 弱み, opportunities 機会 and threats 脅威) 分析の形式で討論された。私は2)の「ヘルス・インフォメーション専門家の役割」に参加した。「ヘルス・インフォメーション専門家の役割」の事実関係として先ず、異なるレベルの利用者向けの異なるレベルの情報、技術はサービスに対応する、マーケティング、技術、サービスは問題解決に対応することを前提として、「強み」は情報のよりよい質、技術の多様性、コミュニケーション、教師としての役割等があげられ、「弱み」は我々の自信の欠如、「機会」としては親機関への利益の証明、臨床的観点から示されるもの、患者治療の改善、政治的協議事項の開発、「脅威」な点は予算が未開発、機会を生かせないこと、訓練することによって専門的技術が見くびられることがある点等が論じられ、結論として「我々の仕事は暗黙の知識と系統だった知識を結びつけ、それを最も適切な形で取り扱うことである」とまとめて終わった。

海外からの講演者8人と地元バルセロナから5人の発表があり、全体の出席者は講演者全てを含めて約40名でかなりクローズドな会合であった。一日目の夕方には、いづれもユネスコの世界遺産に登録されているアントニ・ガウディのサグラダ・ファミリアやミラ邸 Casa Milà (La Pedrera) の見学を行い、港のそばのレストランで懇親会が行われた。因みに、ガウディは路面電車にひかれて、1926年6月7日、サン・パウ病院で息を引き取っている

翌日、USACO 株式会社の会長山川隆司氏に事前に紹

サグラダ・ファミリア正面最上部分

ミラ邸 Casa Milà (La Pedrera)

介して頂いたバルセロナ在住の Prous Science 社の日本アジア太平洋担当部長近藤義広氏と連絡が取れ、夕方にカタルーニャ料理やごはんものの美味しいバルセロナで最も古いレストラン「7 Portes」（1836年創業）に案内して頂いた。量もたっぷりあったパエリアをビールとワインと共に平らげた後に、デザートとしてピカソが必ず食べたといわれる、こちらも皿に大きく出で来たクレマ・カタラン Crème Catalan（クレーム・ブリュレ Crème Brûlée）を堪能して楽しいひと時を過ごすことが出来た。

本大会から帰国後、私の前に発表した Dr. Livia Vasas から e メールがあり、今年の11月ブダペストで開かれる“*Informatio Medicata 2005*”で同じ内容の発表を、研究成果の8割が外国学術雑誌に掲載されている事実に関するデータを新しくして発表してほしいという依頼があり、11月8日、オーストリア・ウィーン経由でハンガリーのブダペストへ飛んだ。

Prous Science 社の近藤義広氏とレストラン「7 Portes」にて

VI. ハンガリー医学図書館協会年次大会 “*Informatio Medicata 2005*”

ハンガリーのブダペストで2005年11月9日と10日、ハンガリー医学図書館協会の年次大会が“*Informatio Medicata 2005*” THE HEALING INFORMATION と題して開催された。

ブダペストの気候は、11月現在で東京に比べて約10度冷たく、防寒の用意をして出かけて行った。

ドナウ河岸と王宮のあるブダ城地区は、UNESCO の世界遺産に登録されている、歴史のある景観の美しい街となっている。

VII. ハンガリーという国

ハンガリーは、約10万 km²の面積（日本は約38万 km²）、人口1千万人（日本は12,000万人）数百ヶ所で温泉が湧いている、ヨーロッパ大陸で最初の地下鉄を1896年に建国千年を記念して開通させ（世界最初の地下鉄は、ロンドンのメトロポリタン鉄道で1863年）、人口比率で世界最多のノーベル賞受賞者（13人、日本は12人）、発明の種類としてコンピュータ（ジョン・フォン・ノイマン John von Neumann, ハンガリー名 ナイマン・ヤーノシュ, Margittai Neumann János）、ボールペン（ピーロー・ラースロー Bíró László József）、ルービック・キューブ（エルノー・ルービック Erno Rubik）等の発明やピューリッツァー賞の Joseph Pulitzer 等が出ている個人の能力・独創性を重視する国の様である。また一方で、オープン・アクセスに関していち早く Budapest Open Access Initiative を提唱、実践してきている国でもある。

宿は、英雄広場のある地下鉄 Hősök Tere から3分ぐらいのところにある Hotel Délibáb が用意されていた。

地下鉄Hősök Tereを外に出ると英雄広場が眼前に広がっている

地下鉄Hősök Tere：手前があるのが切符穿孔機

シャワーしか付いていなかったのので、やれやれと思っていたがよく地図を見てみると歩いて5、6分の処にヨーロッパでも最大規模を誇るセーチェニ温泉があり、溜飲が下がった。3つの屋外プールは、水泳用のプールと流れるプールや底と横壁からのジャグジー、噴水、等様々な仕掛けがあり、深さも首ぐらいまであり、外では隣の

ヨーロッパでも最大規模を誇るセーチェニ温泉の夜の屋外風景

公園で野外スケートが行われている寒さでも皆2、3時間は過して行くといった、日本人以上の温泉好きな国民かなと思った。ハンガリーへお出かけの際は水着、海水パンツは必須である。

VIII. Informatio Medicata 2005 の内容

11月9日9時から開会式が始まった。ホテルから会場までは地下鉄を1回乗り換えて約30分のところにあった。Semmelweis University の Nagyvarad Square は、この辺りでの唯一の高層ビルディングで、その1階のホールで大会と展示が開催された。

Dr. Vasas Livia の司会で、名誉教区牧師 Peter Sotonyi による歓迎の挨拶に引き続き、Zoltan Papp (Semmelweis University Faculty of Medicine / Obstetrical and Gynecological) 氏による「産婦人科における予防の臨床的可能性」と題した講演、次に展示の紹介とプレゼンテーションが出展約10社から12時半まで行われた。

午後からは、Session 1として出展業者との交渉および質疑応答と Jehoda Imola 氏をモデレータとして Andras Javor (Semmelweis Egyetem Informatikai Központ) 氏による「電子医学：明日はやって来た!」、Sandor Kerpel-Fornius (Semmelweis University Pharmaceutical and Pharmacotherapeutical Institute) 名誉教授による「EBMの重要性について」、Tichy-Rács Ádám-Osztályvezető (Budapesti Műszaki és Gazdaságtudományi Egyetem Országos Műszaki Információs Központ és Könyvtár) 氏の「A Nemzeti Kutatás-Nyilvántartási Rendszer」、午後3

会場となった Semmelweis University, Nagyvarad Square (Theoretical Block)

時半から, Kürhner Éva 氏がモデレータとして, Laszló Balkanyi 氏の「臨床家のための E-ヘルス・プログラム」, Lajos Szentesi (Szabolcs-Szatmár-Bereg megyei Önkormányzat Jósza András Kórház Kállay Rudolf Könyvtár) 氏の「病院ウェブサイト鑑別分析」等の発表が行われた。

Session 2の方では, Virágos Márta 氏がモデレータとして, Cary Bruce 氏 (EBSCO) 「電子ジャーナル・コンソーシアム時代に代理店の役割はあるか?」, Ove Kahler 氏 (Elsevier Science) の「Scopus: 発表か滅亡か」, Simon Pratt 氏 (Thomson Scientific) の「現実: Web of Knowledge」, コーヒーブレイクの後に, 4時から Balogh Margit 氏をモデレータとして Erdeiné Töröcsik Katalin 氏 (Hajdú-Bihar megyei Önkormányzat Kenézy Gyula Kórház Rendelőintézet) により「ネット上の患者情報」, Imola Jehoda 氏 (Semmelweis University College of Health Care Library) の「書誌データベース」等の講演があり, 6時からレセプションが開かれた。アトラク

リスト音楽院の留学生による弦楽四重奏の演奏

Dr.Livia および国立戦略的ヘルス研究所の主任司書 Dr.Maria Palotai 氏と

Informatio Medicata 2005の会場風景

ションは豊富で, アラブ・トルコ東洋ダンス, ガーシェイン, デューク・エリントン, コール・ポーターのジャズ・バンド演奏とボーカル, リスト音楽院の留学生グループ MaJa String Quartett による弦楽四重奏の演奏として, 日本からの留学生二人がヴァイオリンとチェロを担当してバルトークの曲に加えて「通リゃんせ」, 「さくらさくら」, 「赤とんぼ」, 「花」, 「浜辺の歌」等が披露された。演奏後, Dr.Livia の紹介で彼女達と暫く話をした。これらの日本の童謡はこちらでは大変評判がよいと言う事だった。私は, ブダペストで日本人による日本の童謡の演奏を聴く機会を偶々得たことに大変驚き感激したが, 二人のお嬢さん達の方がこの場に日本人がいた事に大変

驚かれた様子だった。

アトラクションの最後は, 「2006年ヘア・ショウ」と題してヘア・デザイナーが参加者をモデルにしてロンドン・ファッション2006を基調に仕上げていくという企画で, 夫々の変身具合に大いに盛り上がっていた。

2日目は, 9時から Session 1では Juhász Éva 氏をモデレータとして Mark Schregardus 氏 (Vice President OVID Technologies GmbH.) が, 「医学・臨床分野に

結構ご満悦のお二人

おける連合した検索・リンクの役割について」, Austin McLean 氏 (Director of Scholarly Communication and Dissertations Publishing-ProQuest Information and Learning) による「病院における学位論文, 電子学位論文, 電子情報へのアクセスと利用」の講演が行われた。

コーヒー・ブレイクの後に, Gracza Tunde 氏にモデレータが代わり, Gabriella Beke 氏 (Zala County Hospital Medical Library) が「個々の必要性に応じた書誌提供」, Csaba Balazs 氏 (Polyclinic of the Hospitaller Brothers of St. John of God in Budapest Endocrinological Ward Osztály) が「全人的医療—21世紀または神経内分泌制御の挑戦」というテーマで講演が行われた。

Session 2では, 9時半から Törőcsik Katalin 氏をモデレータとして, Dr Geges József (Information Provider Technologies Adviser) が「モバイル e-ヘルスについて」, Kührner Éva 氏 (Szabolcs-Szatmár-Bereg Megyei Önkormányzat Jósza András Kórház Kállay Rudolf Könyvtár) が「病院における利用者教育」, Dr. Livia Vasas (Semmelweis University Central Library) が「専門的ウェブ利用に関連する司書の経験」, Dr. Apjok András (Egészség Programiroda EüM, ESKI) が「資料表示するための医学統計ポータル」について講演があった。

コーヒー・ブレイクをはさんで海外からの招待講演となった。Marton János 氏をモデレータに11時から筆者の出番となり, 「研究者が自国の研究成果を自国の学術雑誌に発表する支援をしよう!」という内容で発表を行った。この内容は, 2005年5月の第76回日本医学図書館協会総会館長司書会議のパネルを皮切りに, 前記7月のバルセロナにおける国際ワークショップ³⁾, 9月のブラジル, バイア州サルバドールで開かれた第9回国際医学図書館会議 (International Congress on Medical Librarianship, ICML9)⁴⁾ に引き続いて四度目となった。

約束のデータの更新作業は, PubMed を用いて行った。PubMed において最近の5年間を見てみると日本人が書いた記事の収録総数は徐々に増加している。しかし, 日本の研究者が研究成果を日本の学術雑誌に投稿する割合は, 約0.2ポイントずつ下がって来ている。

日本の研究者が研究成果を外国雑誌と日本の雑誌に発表した割合を PubMed の2000-2005年で調べてみると, 棒グラフから, 外国雑誌に掲載する割合は右肩上がりとなっているのに反比例して日本の雑誌に掲載する割合は右肩下がりとなっていることが分かる。外国雑誌に掲載する割合が限りなく80%に近づきつつある。「自国の研究成果を自国の学術雑誌に発表する」という考え方

PubMedにおける日本の研究者が研究成果を日本の学術雑誌に投稿する割合 (2000-2005年)

The percentage of articles published by Japanese in foreign journals and Japanese journals in PubMed (2000-2005) 2005.11.17

	2000	2001	2002	2003	2004	2005
No. of articles	38,528	38,688	39,146	39,815	40,569	36,319
No. of articles published in foreign journals	28,790	29,006	29,213	30,015	30,667	28,562
Percentage of articles published in foreign journals	74.7%	75.0%	74.6%	75.4%	75.6%	78.6%
No. of articles published in Japanese journals	9,738	9,682	9,933	9,800	9,902	7,757
Percentage of articles published in Japanese journals	25.3%	25.0%	25.4%	24.6%	24.4%	21.4%

Percentage of articles published by Japanese in foreign and Japanese journals in PubMed(2000-2005)
2005.11.17

PubMedにおける日本の研究者が研究成果を外国雑誌と日本の雑誌に発表した割合 (2000-2005年)

は, 米国人やカナダ人にはあまりピンと来ないかも知れないが, その他の国は多少の程度差はあっても殆ど日本と似たような経過を辿っているものと思われる。オープン・アクセスについても同様のことが最終的には問題となる。モデレータから, 高額雑誌とは何を持って高いと判断するのかという質問が一つ出されたが, この質問に正しく答えるだけの会話能力を持ち合わせていないのが唯一悔やまれた。

Pirjo Rajakili 氏 (National Library of Health Sciences, Finland) は「医師向けのモバイル図書館」と題して現在フィンランドの国立ヘルス・サイエンス図書館で取り組んでいる医師向けに役に立つポータル・サイトを如何に提供しているか, その実施経験例を紹介した。

最後に Arne Jakobsson 氏 (President of EAHIL, Director of Library of Medicine and Health Sciences, University of Oslo) が, 「学術雑誌の価格と市場」をテーマにやはりエルゼビア・サイエンス社 (E社) の高額雑誌を中心とする電子ジャーナルをも含めた状況の中で図書館がそ

れらを買いつないでいけなくなっている現状に図書館として如何なる対策をとるべきか、市場原理に反する出版を行っている出版社に対する対策等について講演した。彼とは2000年のロンドンのICML8と9月のブラジル・サルバドールで開かれたICML9でも同じセッションで会っていた。後で話したことであるが、彼は徹底的にE社とは闘う、ボイコット運動をノルウェイの国を挙げて行おうと言っていた。私が、しかしScopusはWeb of Scienceの一人勝ちの世界から一石を投じていて現在は安く使えるので良いのではないかと話したら、「いや、ああ云う出版社の売り上げに加担すべきではない。」ときっぱり言い放っていた。しかし、我々の問題意識は共通している、問題解決のアプローチ・方法が若干異なるのだという相互理解をもって別れた。大会は3時に閉会となった。

全体を通して我々のセッションと業者のプレゼンテーションを除いて殆どの発表はハンガリー語（マジャール語）で行われていたので理解が行き届かなかったことは少し残念であった。

Arne Jakobsson氏(左), Pirjo Rajakili氏と展示会場にて

Ⅸ. Semmelweis University Central Library 等の見学

翌11日には、Dr.Liviaの勤めるセンメルweis大学中央図書館 Semmelweis University Central Library, 国立戦略的ヘルス研究所 National Institute for Strategic Health Research, ハンガリー国立セーチェニ図書館 National Szechenyi Library of Hungary, ハンガリー国立ギャラリー Hungarian National Gallery 等を見学した。

センメルweis大学中央図書館は、ヴェザリウス Andreas Vesalius の「ファブリカ」De Humani Corporis Fabricaの初版本（1543年）を持っていると云われたので、是非見せて下さいとDr.Liviaにお願いしたとこ

ろ、彼女の部屋の大きな金庫に入っている様子で一生懸命金庫の鍵を開けようとするが結局過去に開けたことが無いと言う事で残念ながら見る事が出来なかった。

王宮の丘にあるハンガリー国立セーチェニ図書館は、1802年に設立され、蔵書は200万冊の図書、雑誌・新聞は33万種類、17.6万件の楽譜、稿本 manuscripts 約100万冊、地図20万帳、絵画・銅版画類31万点、2.4万件の録音資料、ポスター類300万件、マイクロフィルムを27万件、合計700万以上の資料を所蔵している⁵⁾。

センメルweis大学中央図書館の雑誌閲覧室

閲覧室と書庫を仕切っているステンドグラス

歴史資料室では、貴重書の数々を、音楽資料室ではハイドン直筆の楽譜等を見せて頂いた。

ハンガリー国立セーチェニ図書館を出ると向かい側にハンガリー国立ギャラリーがあり、たまたま

「FUJIYAMA」という浮世絵展が開催されており、訪れて見た。ここでも日本の古い時代の文化が人気を集めているようで、国民性も似ているのかなと思ったりした。

ホテルへの帰り道に、オクトゴン Oktogon にあるリスト音楽院を見て、西駅にある現代風のブダペスト最大

のショッピング・センター Westend City Center に足を運び、夕方には英雄広場の右手にある現代美術館の地下で開かれたジャズ・コンサートに参加して、疲れを忘れることが出来た。

ハンガリー国立セーチェニ図書館の歴史資料室

ハイドンの直筆の楽譜

Utagawa Hiroshige: A Sagami-gawa folyó

Szeretettel várjuk a családokat
gyermekükkel együtt japán
tárlatunk utolsó nyitvatartási
napján, erre a programra.
A részvételhez családi belépőjegyet
kell váltani. 1 felnőtt+max. 4
gyermek; 1200 Ft, 2 felnőtt max. 4

ハンガリー国立ギャラリーの「FUJIYAMA」浮世絵展

リスト音楽院

References

- 1) Jovell A. J. Josep Laporte Library Foundation: a model of knowledge management in the life and health sciences. Health Inform Libr J. 2002, 19:176-80. <http://www.blackwell-synergy.com/doi/full/10.1046/j.1471-1842.2002.00386.x> [accessed 2006-04-10]
- 2) Outline of International Workshop on Building the Future of Health Libraries, July, 7-8th 2005, Barcelona[internet]. <http://www.fbjozseplaport.org/healthlibrary/index.html> [accessed 2006-04-17]
- 3) Tonosaki M. Experiences of Digital Libraries in Japan:

from foreign print, digital journals to own country's journals[internet]. http://www.fbjozseplaport.org/healthlibrary/pdf/m_tonosaki.pdf [accessed 2006-04-17]

- 4) Tonosaki M. Proposal of the movement that publishes the results of scientific research of home country to scientific journals of home country. Igaku Toshokan 2006;53(1):36-40.
- 5) Foundation and function of the library (National Széchényi Library of Hungary)[internet]. http://www.oszk.hu/eng/konyvtar/tortenet/tortenet_index_en.htm [accessed 2006-04-18]